

研究会報告

社会的ジレンマの数理的研究法に 関する研究会

昭和60年度 統計数理研究所 共同研究 (60-共研-62)

開催日: 1986年3月10日~11日

研究代表者: 中村 隆 (統計数理研究所)

この特集は統計数理研究所が主催した「社会的ジレンマの数理的研究法に関する研究会」における報告をまとめたものである。社会的ジレンマとは、集団において個人的利害が全体の利害と対立する場合を指す。囚人のジレンマを原型とする社会的ジレンマは、論者による名称、強調点の相違を伴いつつも、行動科学、社会科学の広範な分野で研究されてきた。

この研究会を企画する母体になったのは、数理社会学研究会(1986年の3月に数理社会学会に改組)内の「社会的ジレンマの数理解析」班である。同班の構成員は、個人的に社会的ジレンマの研究を行う一方、共同作業として社会的ジレンマの定義の検討、文献サーヴェイ、定式化、課題の整理を行ってきた。その共同作業は、社会学、社会心理学を基礎としながら広い領域の業績を整理したものといえる。同班の作業の成果は海野ら¹⁾に収録されている。

「社会的ジレンマの数理的研究法に関する研究会」は、海野ら¹⁾の検討では満たされなかった必要性に対処することを目的に企画された。その必要性とは第一に、社会的ジレンマ研究の種々の研究法に従う研究者が相互に交流し、各々の研究法の可能性と問題点を検討する必要性である。社会的ジレンマ研究には、モデル構成、ゲーム実験、シミュレーション実験、事例研究など、異なった研究法が存在する。しかしそれらの研究法に従う研究者は半ば独立に、相互の交流がないままに作業を進めているのが現状であった。第二に、同班の内部では、社会的ジレンマという枠組が構成員の専攻分野以外、特に政治学、経済学においていかなる意義を持ち得るかを検討する必要性が認識されていた。第三に、社会的ジレンマの枠組が社会制御、ないし社会問題の解決の点で、有効な視点となり得るか否かを評価する必要性が認識された。

研究会は以上の必要性に基づいて企画され、またその必要性によく応えたと考えられる。第一に、報告は研究法別に配列された。すなわち、モデル構成(高木、山本)、ゲーム実験(村田)、シミュレーション実験(佐藤)、事例研究(日下、箕浦)、総括(高坂)、である。第二に、社会学、社会心理学にとどまらず、工学(日下)、政治学(山本)、経済学(北島、小椋)の分野からの参加を得た。第三に、特に箕浦、日下の報告を中心に、現実の社会問題への対処法に関して活発な議論が交わされた。

参考文献

- 1) 海野道郎, 高坂健次, 山岸俊男, 岩本健良, 高木英至, 長谷川計二(1985)。「社会的ジレンマ」研究のフロント, 数理社会学研究会(編)「数理社会学の現在」所収, 4-50.

プログラム

- 「社会的ジレンマ・モデルの検討」 高木 英至 (埼玉大・教養)
 指定討論者: 海野 道郎 (東北大・文)・永田えり子 (慶應大)
- 「ゲーム実験によるジレンマ研究について」 村田 光二 (帝京大・文)
 指定討論者: 三井 宏隆 (慶應大・文)・伊藤 英 (東北大)
- 「非マトリクス型の社会的ジレンマ実験」 佐藤 香 (北大・文)
 指定討論者: 広瀬 幸雄 (名大・文)・岩本 健良 (北大)
- 「公共財の供給をめぐるゲーム」 山本 吉宣 (埼玉大・教養)
 指定討論者: 北畠 佳房 (筑波大・社工)・木村 邦博 (東北大)
- 「地域環境をめぐる社会的ジレンマと工学的対応」 日下 正基 (阪大・工)
 指定討論者: 小椋 正立 (埼玉大・教養)・長谷川公一 (東北大)
- 「社会的ジレンマ状況下の行動の規定因」 箕浦 康子 (岡山大・文)
 指定討論者: 長谷川計二 (東北大・院)
- 「ジレンマ研究の問題点と課題」 高坂 健次 (関西学院大・社)
 指定討論者: 今田 高俊 (東工大)・山口 弘光 (松山商科大・人文)